

一事が万事

落語家 柳家さん生

やなぎや さんしょう



©小杉善和

あけましておめでとうございます。

昭和52年(1977年)秋、私はこの世界に入りました。三代目柳家小満んに入門を願い、五代目柳家小さんに預けられるということから、この世界での第一歩が始まりました。

当時、柳家一門は既に大所帯と言われるほどで、直弟子だけでも二十数名、その弟子いわゆる孫弟子まで入れたら、50人は優に超えていたと思います。弟子になってからの暮らしは、それはそれは今までは違い、側から見れば大変なことのようですが、自ら飛び込んだ世界でスカウトではないので、つらいとか大変とかそんなことより、ただただ一生懸命言われることをこなすのが精一杯で、そんなことすら考える余裕などまるでありませんでした。

噺家の世界は身分があり、「見習」「前座」「二つ

掃除では障子の棧も拭きます。一番下のものが、当日来ているみんなの食事の支度もするのです。よく大勢弟子がいると全員が師匠の家にいるように思われていますが、二つ目という身分より上の方々は時折おいでになるだけで、家にいるのは前座だけ常に3、4人というところでした。

もちろん師匠の家の隅々まで毎日掃除するのです。げた箱など師匠の靴は靴箱に収められていました。入りたての時は「こんなところまできちんとしてるんだ」と思ったものです。箱には全て字が書いてあります。なんだろうと毎日掃除をしていると覚えるもので、師匠の靴は弟子が出すのですが、お出掛けの前に「今日の靴は？」と聞くと、「北海道、茶、ひも」というだけです。初めは分からないのですが、箱には確かにそう書いてある靴箱があるのです。師

目」「真打ち」と分けられています。この身分制度

は東京での決まりで、いわゆる関西という大阪の噺家の世界にはないのです。仲間の呼び方も関東では兄弟子、先輩弟子を「あにさん」、関西では「にいさん、おにいさん」と違いがあります。もちろん真打ちになれば「師匠」と呼ばれます。関西は、お弟子が来ると師匠と呼ぶようになるようです。

師匠小さんの内弟子となり、見習のうちは一箇中師匠の家のこと、殆どは掃除に明け暮れ、小さんの家では、師匠の朝ごはんも弟子が作っておりました。ことごとく学校では教えてくれないことばかりの日々でありました。掃除は、まずは師匠や弟子が飲んだ茶殻が洗い場の隅のザルにあげられていて、朝の掃除の時には畳の部屋にそれを撒いてほうきで掃き出します。もちろん障子にははたきをかけ、拭き

匠が自分のお気に入りには覚えていて形や色を言うだけなので、弟子は箱に書いてあるのを覚えてそれを出します。そんなことも毎日掃除をしていればこそできることなので、毎日の掃除は無駄ではありませぬ。私などは覚えが悪くて、なんどもしくじったものです。でも慣れてくると楽屋に入った時に役に立つのです。楽屋では出演する師匠方の靴の扱いは前座の仕事なので、片付ける時にそれぞれの師匠の靴を覚え、お帰りの時にはさつと履物を出すことも、普段からの掃除のたまものなのかもしれません。「一事が万事」と言われるのもそんなことなのでしょう。私などはよく物事を忘れ、「酉年は三歩歩くと忘れる」なんて言われたものです。確かに私は酉年ですが、酉年の人がみんな忘れっぽいわけでもないでしょう。

元日には、弟子一同が道場に黒紋付羽織袴で集まり宴席となります。そんな時も、大勢の人の間を縫うように飲み物など運ぶ際、大きな声で「通ります！」と言うのも決して失礼なことではなく、皆さんの着物を汚すことのないように、それが全て楽屋での動きの元となるから修行とはよくできたものだといふと分かります。

そして二つ目昇進まで「庭の石灯籠」「夢遊病」「旅先での事」などなど、数知れぬしくじりと修行の日々が続くこととなるのですが…。お読みいただきありがとうございます。

時の調べ Essay

略歴

1957年富山県富山市生まれ。1977年柳家小さん門下3代目柳家小満んに入門。前座名は小勇。1982年二つ目に昇進し、1993年真打ちに昇進。さん生に改名する。出囃子は多摩川「晒しの合方」。主な持ちネタは「笑の大学」「試し酒」など、長屋物や武家物、古典新作に限らず落語と言われる世界滑稽噺や人情噺など一人でも多くの人の心に残る噺を語ることを信条としている。趣味は、自転車(ロードレーサー)、お酒、音楽、映画鑑賞、俳句など。

『落語版笑の大学』は、人気劇作家三谷幸喜の傑作戯曲を、大学の先輩である柳家さん生師だけに特別に許可されて落語化した1999年から公演を重ねている。思想や言論統制が進む太平洋戦争間近の昭和15年を舞台に、喜劇作家とその喜劇台本の内容を精査する検閲官との丁々発止の駆け引きを描いた作品である。



富山県ほとり座にて

©小杉善和